



TITLE:

総合討論

AUTHOR(S):

掛谷, 誠; 立本, 成文

CITATION:

掛谷, 誠 ...[et al]. 総合討論. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 22: 70-93

ISSUE DATE:

1996-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187609>

RIGHT:

総 合 討 論

司 会：掛谷 誠・立本 成文

立本 アフリカとの地域間研究は3回目になる。いままでの議論を基礎として「移動と分散」というタイポロジーを出していただいたと思う。この重点領域研究での地域間研究は、中国、中近東、インドに続く4回目だが、いつも問題になるのは比較の単位と時代である。中国やインドとの研究会では、なぜ「まとまり」があるのかを問う立場であったが、今回はアフリカ、東南アジアとが「まとまり」のない地域だ。我々の主張は常に「まとまり」のないものに「まとまり」をつけるのが地域研究の一つの役割だというものだ。「まとまり」のある地域ばかりが文明として主張してはいけけない。21世紀に向けて、「まとまり」のない地域をどのように主張するかという文明論的なことも考えている。

これまでの議論を基に、アフリカと東南アジアを比較するためのタームを考えてみた。まず「通史／特定の時代／現代」と、その比較の時代を明らかにする必要があるだろう。今回は通史的な議論がされてきたが、歴史を通じて議論する場合、「構造」「元型」「プロトタイプ(代表的類型)」という形で整理しておかなければ、異夢同床の議論となるだろう。

「単位」でも同じことが言える。最初はスワヒリと東南アジアのマレー世界を比べる議論が出たが、むしろ内陸アフリカと乾燥ベルトとの比較をした方が、地域研究として有意

義ではないかという議論も必要だろう。アフリカの一部と東南アジア海域世界を比較する時にも、アフリカの一部はどう区切るのかを意識しておくべきだ。内陸アフリカなのか、あるいは内陸アフリカ+スワヒリ、サヘルとまで言っているのか。予めその単位を決めて議論する場合と、議論の中で決めていく場合と両方があると思う。

何を比較するのかという場合、例えば人口で比較するような細かい現象を比較するのも意味がある。だが、地域研究で地域間比較するのであれば、細かい比較と共に、最終的には大きなイメージを比較することが必要ではないか。地域研究は単に学際的な人が集まり、異なるマッピングを重ね合わせて、重なる重ならないを言うだけに終わってはいけな

【比較の単位と時代(スケール)】	
通史(プロトタイプ・元型・構造) / 特定の時代/現状	
スワヒリ・バムクーヘン	東南アジア・玉ねぎ
乾燥地帯ベルト	灌漑地帯
アフリカ	東南アジア
アフリカの一部	東南アジア海域世界
何を比較するか：全体は比較できない?	
【比較の軸】	
Ecology	
大陸-内陸ニッチ	島嶼-海岸ニッチ
砂漠-乾燥-灌漑	乾燥-灌漑-海
環境変動	海進
フロンティアの森	灌漑の森からフロンティアへ
牧・農耕	流動農民・農民 <i>caravan</i> 農民
オアシス、穀類	イモ、サゴ、コメ
採集	山地民
domestication?	<i>agri-culture?</i>
生態系	香料・南海産物
様々な生態	生態調和的
Tradition	
バントゥ・サヘル・スワヒリ	マレー・ジャワ・プラナカン
スワヒリ	マレー
サヘル	マラカ海峡
土着伝統/移住伝統	外文明/内世界
イスラーム	ヒンドゥー・仏教・イスラーム
スワヒリ化(ゆけへ)	国家の正当性(衣装)
部族/共存国家/無文字	民衆/マンダラ国家/歴史
分断 <i>segmentation</i>	ネットワーク/共振 <i>resonance</i>
<i>articulation</i>	<i>gradation</i>
移動・離散	
分かれる論理(くくる必要性)	つながる論理
Frontier	
(metropole)	
オリエント・マグリブ	インド・中東・ヨーロッパ
インド洋	中国・ロシア
ヨーロッパ	太平洋・USA・オーストラリア
大西洋・アメリカ	
internal frontier	external frontier
内陸の論理	海(島嶼)の論理
南北軸	東西軸
世界(乾燥地帯)と19-20の縁辺	東西19-20の中間点

地域間比較：アフリカと東南アジア

い。地域全体の比較、何によってその地域を括ったのかという比較をする必要があるだろう。その比較軸を今までの議論の中からひらいて、エコロジーと伝統とフロンティアというキーワードで整理したものをお配りしている。これからの我々のディスカッションの中で補充し、彫琢していくことにしたいと思っている。

高谷 胴元として希望を述べておきたい。スワヒリとサヘルの話聞いたからこそ、内陸アフリカの性格が明確になった。これで比較のための準備ができた。そこでこの総合討論では、内陸アフリカと島嶼部東南アジアの比較を前面に出して、そこから話題を広げる形で議論する方が地域研究としてはイメージが掴みやすいように思うがどうだろうか。

家島 内陸アフリカの論理で、バントゥ諸言語集団の移動と歴史的な展開過程を話されたが、バントゥは民族集団ではなく、バントゥ系の諸言語を持った集団と捉えていいと思うが、東南アジア側にはそれに対応できるようなものを考えるとすると、それを何と考えればいいのか。先程の話では、オーストロネシアとの比較という提案も出ていたが、移動性・流動性という点では、バントゥ系諸集団の特徴は、東南アジアにおけるオーストロネシア系の諸集団とも共通しているように思える。従って、その両者の違いを比較していけば、スワヒリ、サーヘルと東南アジアの相互比較の問題ともつながるのではないか。

坪内 移動と拡散の違いは重要なポイントになると思う。東南アジアでは移動の跡をある程度は辿ることができる。自分の祖先はどこから来たのか、あるいは自分の集落は元はどこに居たか。そこからどう分かれてきたかという記憶の糸を持っている。祖先の足跡がある意味では意識し、精神的なつながりを感じている側面がある。アフリカの拡散はどのようなイメージで捉えればいいのか。

日野 過去のグループについては口頭伝承でかなりわかる。その中には荒唐無稽なフィクションも含まれてはいるが、どう動いたかということや、どのグループと近縁かということもある程度はわかる。伝承の類似、言語の類似、主要な作物の名前の共通点などを手繰ることのできるかなりのことが分かるだろう。東アフリカの牧畜社会では、祖先の墓がどこにあるかということでも辿ることができる。富川盛道さんも5代～10代にわたる研究をされており、色々な人がバラバラにしている研究を集めれば、かなりのことがわかるようになると思う。

掛谷さんが話されたバントゥのエキスパンションは、そういうデータを勘案した上で作られたと思う。栽培植物の伝播等、様々な形の傍証や歴史考古学的な資料も含めて、特にバントゥの場合は2、3千年ぐらいの話でもあり、再現は可能ではないかと思う。いままで口頭伝承は荒唐無稽で、歴史意識の意味はあっても事実としては使えないというのが一

般的だった。だが、例えばカメルーンのエリドリッジ・ムハンマドは、歴史的に言えば数百年の程度の話だが、口頭伝承の中からフルベ族の移動の軌跡を出している。ある程度のアフリカの全体の人々の動きも、口頭伝承から追跡可能だと思う。ただイスラム教徒は先祖代々の話を切ってしまう。これからイスラム化がさらに進んできた場合には、そういう伝承も切れてしまう可能性がある。

掛谷 富川さんや和崎さんの仕事と、最近やっとながつながってきたというイメージが強い。私自身は移動の後を辿るような仕事はあまりしていない。ただトングウェを調査したときに、たとえば一つのクランがベンバから来たという話があり、伝承的には辿ることができる。ベンバへ行ってみると、ベンバはルバから来たと言う。民族形成の伝承ではそういうことがある。一緒に暮らしてみても、何よりも一番大きな印象は、「テンベア」や移住がまことに常態にあることだ。市川さんは習性と言われたが、結局はエコロジーと、バントゥの歴史と文化に内在する特性に根差しているということになる。そういう特性は、ここ200年、300年の民族形成の歴史や、バントゥの移動にまでつながっている。このようなイメージを持っている。

田中 比較のスケールと時代の問題と一緒に議論されていると思う。バントゥの大拡散に関連して、東南アジアとアフリカを比較すれば、東南アジアは数千年の歴史になるが、

オーストロネシアンやプロトマレー、デュートロマレーの移動という枠組みがイクイバレントなものになる。

坪内さんが言われた移動は、マレー系の人達が既に東南アジアのいまの島嶼部に入ったあと、焼き畑農耕を主体にした生業形態を持ちながら集落移動させた時代の移動になる。バントゥの大移動は2、3千年の尺度で見ると、北から南へ大拡散している。それを細かく見れば焼き畑農耕民が移動を繰り返し、全体としては北から南へと動いたのだろう。東南アジアも焼き畑農耕という生業と共に集落が移動する社会が続いたと思う。

次の時代になると、東南アジアと内陸アフリカとの違いが見えてくる。東南アジアでは焼き畑の移動ではなく、エクスターナルな刺激や需要によって人々の移動が作り出されてくるようになる。

歴史をどれくらい遡るかは分からないが、東南アジアでは例えば米がある種のフロンティアを作る時代が15～16世紀頃にあった。そしてヨーロッパの需要が増えてくる19世紀頃には、例えばココヤシやゴムでフロンティアが形成される。さらに戦後はチョウジ、最近ではカカオでフロンティアができてくる。内的な運動ではなく常に外からの刺激で人の移動が起こる。こういう移動は、焼き畑の時代に集落が定期的に移動するようなものとはスケールも違ってくる。その最大の特徴は、移動した人がネットワーキングを作ることだ

ろう。山田さんは資源のネットワークの話をされたが、人の動きもネットワークになる。いったん100km、200km先にフロンティアを作ると、そこに必ずホームグラウンドから人が来る。そこでの物の流通によってまたネットワークができる。

立本さんのレジメの中に、インターナルとエクスターナルというタームがあるが、東南アジアの場合、特に19世紀以降はエクスターナルな移動を強烈に感じる。高谷さんの言われた山の民にはいまでも焼き畑的な移動が残っているが、我々が東南アジアで移動という時には、エクスターナルな刺激や需要による移動で、多くの集団の移動が常に繰り返されている。東南アジアでのフロンティアや移動は、自生的なものではない。そういう伝統そのものは自生的かもしれないが、この性格が持続するのは常に外からの刺激によるものだ。だからそこ、東南アジアと内陸アフリカを比べた時に、随分と違うという印象がある。アフリカでは20世紀以降、同じようなことがあるのかを聞いておきたい。

立本 トレーガー(担い手)の主体は何かと言えば、東南アジア海域世界ではオーストロネシアンと、アフリカではバントゥ語族であり、確かに語族なのだが、しかし、語族が世界単位にそのままなるというのでは具合が悪い。

田中 そこまでは言っていない。

立本 比較の実態としては語族がコアにある。

それを基礎に世界単位ができてくる。

市川 ただ、バントゥとオーストロネシアンとは随分レベルが違う。オーストロネシアンに相当するのはニジェール・コルドファンというレベルなのではないか。バントゥの上のレベルに、コンゴ＝ベヌエというのがあるが、その中の類縁関係を見ても、ドイツ語とオランダ語ぐらいしか違わないとも言われている。

嶋田 西アフリカの海岸地帯は、ヨーロッパが来ることによってアブラヤシやパイナップル、茶などのプランテーションができる等の変化がある。これは全く東南アジアのエクスターナルなところ、特にマレーシアのゴム・プランテーションを作っているようなところに対応すると思う。

田中 その時に人が自発的にそこへ向かって移動していくのか、あるいはプランターが来て人を集める形で行われるのか。そういうところが東南アジアとアフリカの違いを議論するときには重要だと思う。

嶋田 最初は、アフリカの人はそういうところで働くことを知らないから、ミッションが奴隷を解放すると称して強制労働でアブラヤシ農園を作ってしまう。そのうち金が貰えるとわかれば自分から集まってくる。最初はプランターが来て集めたが、後はかなり自発的な動きがある。

市川 その前のヨーロッパ人の到来以前の移動ですら東南アジアとアフリカは随分違う。そもそも森の民というのは東南アジアには居

なかったのではないか。東南アジアでは、人々は元々海岸近くに住んでいて、エクスターナルなトレードが始まると森林の物産を求めて森の中に入るようになる。その変化で生活全体が狩猟採集民化していくという過程がある。バントゥはそうしたトレードとは関係なく、自分達の生活のために森の中に入った。なおかつそこには既にピグミーという先住民が森のエキスパートとして生活していた。そういうところに焼き畑を導入していったということで、もともと森の民の居ないところに商業目的で森に入ったのと、森の中に先住民がいてそこを生活の舞台として入ったというのでは随分違うという気がする。

日野 バントゥの人はエキスパンションはしたが、海を越えて行こうとは考えたこともない。島がマダガスカル他になかったこともあるだろうが、東アフリカの海岸にぶつかったら、今度はUターンしてザイールの森林へ向かっていく。海をルートとしては殆ど考えていないかった。奴隷で連れて行かれることはあったが、外圧の力で起きたことだ。アフリカの人が内的な自分達の触発の中で、外へ出て行こうと考えたのは、非常に例外的なところを除けばないだろう。アフリカが広すぎるということもある。

立本 大陸と島嶼部の比較においては、移動のパターンの方が重要ではないか。

松原 東南アジアに森の民は居なかった、中国との交易によって森の中に入ったという説

もあるが、それでも彼らの知恵は本当に深く森の民だと思う。日本の縄文時代を考えれば、数は多くなくても森の中で暮らしていた人達はやはりいたと思う。そこでの質の違いはそれ程違わないだろう。アフリカが基本的に生業のゼネラリストという意味でいえば、ほとんどの世界はゼネラリストだと言える。基本的にはそれに対応するしかなかった。ただそこから次の展開が効いてくる。ゼネラリストを基盤として続けていくか、エクスターナルの問題も含む様々な要因によって、ゼネラリストの中から分化する部分が出てくるかという問題だ。その中で内陸アフリカと東南アジア島嶼世界という、そこでの文化が起ってくる。

立本さんのレジメではアフリカのタームに domestication が入っているが、アフリカでは家畜の domestication というのは一切なかった。アフリカの奥にあれば沢山の野生動物がいても、実際に現在の家畜として飼われているのは全てユーラシアから来たものだ。ユーラシア大陸内陸部とアフリカ大陸との、歴史展開の違いとして重要な決め手になると思う。ユーラシアでは domestication が起こることによって、農業と全く異質な遊牧社会が成立し、そのインタラクションの中で歴史が構築されていく。だがアフリカの場合は、バントゥがいくら拡散していても、全体的にはゼネラリストとして対応しており、異化したものの存在にはなり得なかった。そ

ういう極端な形の遊牧と農耕との対立関係や、インタラクションというものがアフリカ大陸の中では生成しなかった。ユーラシアの歴史とは随分違った歴史を歩んできたと思う。

嶋田 遅かったということは確かだと思う。西アフリカの牧畜民であるフルベの場合、非常に短期間の間にサハラの南を移動している。バントゥが展開する中部アフリカは一種のノーマンズランドだった所で、いままで使われていなかった所に拡散したというイメージで捉えている。サハラの南の牧畜民も同じで、いままで牧畜民が殆どいない所に、ある時期にすごい勢いで広がっていった。その意味で松原さんの意見にも同意できる。ただ後で牧畜民を農耕民との相互作用のなかで色々な国家が出てくる。大湖地方のブルンジ、ルワンダのツチ・フツの農牧国家、サハラ南縁部でもフルベの国家がある。インタラクションとは何を意味するのか、もう少し明確にしてもらえれば分かるが、やはり牧畜民と農耕民の対立あるいは協調のなかで新しい国家社会が成立したという傾向も、アフリカの歴史にはある。

立本 乾燥地帯の移動と湿潤地帯の移動とを二つに分けて議論されているが、乾燥でもユーラシア大陸とアフリカ大陸は違うと言われている。我々が議論している内陸アフリカの移動と、乾燥の移動との一番違いは何になるのかを確認しておきたい。

松原 本質的な違いはあまり無いかもしれない。

い。ただ、ユーラシアの遊牧民の移動は、全生活体系を背負ったまま移動している。全て家畜群と共に移動することは、全生活空間を違う土地に移していくだけで、いわゆるフロンティア開拓とは質が違うものだ。農耕の要素とは全く異質なもので、その異質性が歴史の展開に効いている。先程のアフリカの王国は、殆どオートジェニックに成立してきたと思う。遊牧にあたるような異質性とのインタラクションは出てこなかった。それがユーラシアとの歴史の違いと言えるだろう。次の段階は東南アジアの島嶼世界と内陸アフリカを比較したときに、何が決め手になって展開が違ってきたのかという問題になる。一つはエクスターナルの関係が確かに効いていると思う。その他には何があるだろうか。

掛谷 今日は大湖地方の王国の話も出すつもりだったが、抜けてしまった。大湖地方には農耕と牧畜のインタラクションで展開し始めた世界が、部分的にはあるが存在していた。バントゥの中にも牛を伴って、パストラリストになっているのもいる。農と牧に依存しながら暮らしている人もいる。今日のアフリカの話で抜けていた類型がそれなのだろう。その類型が出てくると、アフリカの乾燥地帯の持つ意味が、もう一つクリヤーになってくるのではないかと。嶋田さんの場合は、それにイスラームがかかわった文明形成の問題だが、生活パターンの形成から言えば、牧畜と農耕のインタラクションという形で展開した部分

もアフリカにある。

嶋田 フルベ族も大陸の西の端からカメルーンまで、東に向けて生活を変えないで移動している。そして中央スーダンでナイロト系の移動あるいは黒人アラブの移動とぶつかり、行く場所がなくなった所で国家形成が起きているという印象がある。これは牧畜民だけでできた国家でなく農耕民と牧畜民との間のインタラクションだ。

松原 時間的スパン、歴史的スパンの違いがそこに効いているのかもしれないが、福井さんのボディの話を聞いても、やはりゼネラリストだと思う。牛は飼っているが焼き畑農耕をやり、狩猟採集もやる。そういう形態は少なくともユーラシアの遊牧世界の中ではあり得ない。そういう要素は全くない。それはやはり非常に違っているところだ。歴史的展開の違いがもちろん背景にあるのだろう。

掛谷 確かにゼネラリストの潮流が現代にまでつながっている。もちろんスペシャライゼーションの流れもあるのだが、やはりゼネラリストの潮流が主流としてごく最近まで続いてきた。

嶋田 東アフリカの牧畜民はゼネラリストかもしれないが、フルベはゼネラリストではない。かなり専門化している。フルベ族に親しんだ目で東アフリカの牧畜民をみるとなんといいかげんな牧畜民だとも思うだからこそ逆に政治的な力で農耕民との統合関係をつくらざるを得なかった。東アフリカの牧畜民は国

家形成をしなくても、自分で何でもやって生活ができるという印象がある。しかしフルベ族は牧畜に専門化していたので自立は難しかったように思う。西アフリカのサハラ南縁の乾燥地帯は一般に専門化が進んだ地域で、インドのようなカースト制世界とも見られている。

高谷 東南アジアもやはりゼネラリストだ。バントウの移動開始と時間的に近いのは、稲作を持ってベトナム辺りから拡散していった人々だろう。それを東南アジアは焼き畑稲作民と言ってしまうが、実際には採集あり、水牛飼育ありで、極めてゼネラリストだった。米を作りながら色々なことをしている。その意味では松原さんの言うように、東南アジアもアフリカも違いはないのかもしれない。

エクスターナルなインパクト以外に何か特徴があるのかという質問が出ていたが、やはり米がある。かなり早い時期に定着的な谷間の水稻耕作民が現れる。彼らはドンソンドラムを持って、雨ごいや祭祀がありコミュニティができていく。それが違う点だ。東南アジアもゼネラリストだが、同時に水稻の肥大が一つの特徴としてあり、そして、エクスターナルな人達がすぐ近くに来る。そういう状態ではないかと思う。アフリカで言われているゼネラリストと、東南アジアの焼き畑民が実態としてどう違うのか、同じなのかという点を議論したらどうだろう。

掛谷 東南アジアを考える場合、インドがあ

り、中国があり、イスラームが入りという、文明流による重層化という形で、エキスターナルな刺激のもとで常にフロンティアであり続けた。外側の文明流が、フロンティアの場の構造を変えていく。そのことによってまた新しいフロンティアが出てくる。外文明の流入で重層化していくことによって、東南アジア「内世界」の場の構造が変換し、新しい質のフロンティアが形成されてくるというイメージで、エキスターナル・フロンティアなのだろうか。

坪内 場の構造は確かに二つの側面がある。エキスターナルな形で形成されたフロンティアというのは、需要が生じてフロンティアができたと解釈することもできる。だが、それだけで解釈してよいものだろうか。焼き畑自身の内的な移動の欲求もある。東南アジアの人の内的な動きと、外からのエキスターナルなフロンティアとの関係をどう捉えるかが、東南アジアにとっては重要なことのように思う。

もちろん外的なものも重要だが、全て外的なものが動かし、あるいは精神構造もそれが規定するとは言いきれない。東南アジアの焼き畑耕作民や水稲耕作民では、そのメンタリティは外的な意味での採集に一番の力点があるのではなく、むしろ生業そのものに力点がある。ものを採ってくるというのは、これに継ぎ足されたもう一つの要素に過ぎないのではないか。東南アジアの人を商業的な感覚で

捉え、それで山の奥まで塗り潰していくことに対しては抵抗感がある。

田中 エキスターナルな刺激に反応するだけではない。東南アジアでは、例えば稲作民が自分の生業を拡大するために、地道な百姓の道としてフロンティアを自生的に拡大していった。ある意味では掛谷さんのバントウの移動とよく似た性格を持っている。エキスターナルな刺激によって、それに反応していくという一面を強調し過ぎたと思うが、やはり二面あるのだと思う。ただエキスターナルな刺激に反応する人達がいることがポイントになると思う。

少なくとも植民地時代以降になれば、内陸アフリカにもそういう刺激があったはずだ。それに対する反応はどうだったのか。掛谷さんの話の中では、アフリカには「最小性の経済学」「平準化のメカニズム」という社会全体の性格があり、自分の富をできるだけ目立たないように分配していく社会のメカニズムがある。東南アジアの場合、確かに自生的に自分の生活の糧を求めて移動をしていくが、その時におそらく平準化や、最小経済学ということは考えていないと思う。儲かることを人より先んじてという、ある意味で先駆的なことや機転をきかすことに価値観があるように思う。例えばゴムが儲かるとなれば、いち早くゴムを植えて儲けに走る者が出てくる。それを追いかける者がまた出てくるという、ダイナミックな展開がある。アフリカの場合

にも、外からの刺激は内陸と言えども20世紀に入ればあったはずだ。それが東南アジアほどには急速に展開しなかった。最小経済学という形がメンタリティにまでも及んでいるのだろうか。

掛谷 私自身の好みでそういう世界をクローズアップしているが、やはり違う面もあることを言うべきだったと思っている。

田中 掛谷さんの論法は、ゼネラリストとしての生業形態を保持し続けたから、そういう社会ができたというものだ。ところが一方で、スペシャライゼーションという言葉が使われている。地域によって農業の集約化が起るようなスペシャライゼーションが、外的な要因によって起こっているのか、内在的な小農農業の発展によって起こっているのか。そのところが東南アジアと違うと感じる。

掛谷 その通りだと思う。アフリカの将来を考えて、ある種のアフリカ的な интенシフケーションを模索している。例えばマテンゴの農耕をアフリカの интенシフケーションと考えていくのか、スペシャライゼーションと考えていくのか。それは小農の発展形態というよりも、状況的対応の中で展開してきたものであり、あるローカルな地域へのスペシャライゼーションなのかもしれない。そこがいま、アフリカの農業を考える時の一つのポイントだと思っている。

田中 スペシャライゼーションというよりも、どうしようもなくインボリュートしている

ということだろうか。

掛谷 むしろインボリューションと言った方がいいかもしれない。インボリュートした形態が、我々の目には интенシフケーションと見えた。だが果たしてそれを интенシフケーションと言っていいのかという思いがある。それをもう少しアフリカニストの中で議論する必要があると思っている。

日野さんが、東アフリカは北海道みたいなものだと比喩されているのが面白いと思った。北海道で様々な異なる出身の人が、お互いに悪口を言いながらも楽しく生きている世界が、アフリカと同じだという意味のようにも思うが、もっと深い含蓄があるように思う。

日野 私は元々北海道で生まれ育ち、そこから本州へ来た。アフリカでも東と西を比べる時に、東が北海道で西が本州と比喩的に言っている。もちろん現象的に北海道の人が日本の各地から出てきたのと同じように、西アフリカの各地から東へやって来る。そしていままだ移動しているということがある。北海道でもファミリーヒストリーをとると、本当にまだ動いている。

もう一つは集落の作り方が違う。西アフリカの場合の多くは、集村にかたまって住み周りの畑に出かけていく。村が動く時は村ごと動くという形だ。東アフリカでは耕地や道の近くに家があり、歩いて行くといつの間にか隣の村へ行ってしまふ。散村と集村という違いがある。西アフリカの場合には集落の中心

に店や役場という都市的なものができてくる。ところが東アフリカや北海道では、道ばたに店が集まって役所がまた作られていくような、農村市街地的な形で都市ができてくる。このように東アフリカは北海道、西アフリカは内地という比喻を以前からよくしている。

和崎 私が調査している西アフリカの王国は、嶋田さんの調査されたところと似ているが、基本的に内陸アフリカとは違っていても、ゼネラリストの生活感覚はある。王国が作られ王都ができて、エクスチェンジのセンターになる。職業も分化しスペシャライゼーションが進むが、ある王都の王宮の役職者も店員をしていたり、農繁期には農業もやる。それは伝統的な王国形成の都市はもとより、現在の人口生態の局地の大都市に行っても都市農業は盛んに行われている。一人の人間が非常にマルチプルな職業を持つ。季節にともなって左官もやれば、農業もやる。荷抱えで物を売ったりもする。それは単に貧しさからくるインフォーマルセクタというのではなく、元々そういう戦略が背後にあると考えている。

嶋田 ただ私は、はじめカメルーンで調査して、次にマリに行ったとき、マリでは伝統的なスペシャライゼーションがものすごく進んでいるのにおどろいた。西アフリカ内部にも、ゼネラリスト文化圏か、スペシャリスト文化圏かというちがいがあり、サハラ砂漠に近づくにつれてスペシャリストが多くなるように思う。なおウォーラーSTEINを批判して

ヨーロッパ人の世界への拡散はフリー・トレードのためというよりは入植運動ではなかったとしたが、これもいいかえれば、ゼネラリストとしての移動であったということだ。実は現代のヨーロッパ人自身もゼネラリストだと思っている。日本人に比べれば本当にゼネラリストで、家まで作ってしまうようなことがある。しかし交易活動はゼネラリストの移動ではない。サハラの交易者は新しいフロンティアを獲得するのではなく、既に人が住んでいる所をつなぐ側面が強い。それはかれらが専門分化したスペシャリストだからだ。乾燥地と湿潤地の移動がどうちがうのかという立本さんの問いに、サハラのような乾燥地では人はスペシャリストとして移動し、湿潤地帯ではゼネラリストとし移動するという答えも可能だ。

立本 アフリカに比べれば、東南アジアの移動は規模的には小さいという印象がある。例えば2000年というタイムスパンを考えれば、この2000年はそれまで動いていたマレー系も、バントゥのように動かなくなり、小さいエクспанション的な動きでしかなくなる。その移動は相当違うと感じられないだろうか。東南アジアも移動と言っているが、実は本当に小規模なものだ。

坪内 これまでの議論では何もかもがよく似ていて、どこが違うのだろうかという雰囲気しか起こらなかったが、立本さんの発言で初めて違いに気付いたように思う。アフリカに

おけるタイムスパンは非常に違いを感じる。だが、過去を仮に100年、150年とか、200年だけに限ってみれば、どれぐらい違うのかがまた気になるところだ。そういうスケールをここに持ち込む方がいいのか悪いのかという問題もあるが、立本さんが言われたように近い距離で動いているのは確かだ。大きな目でみれば、東南アジアは殆ど動いていないとも言えるだろう。

立本 150年のタイムスパンでは、前にあった村がわからなくなるような、そんな極端なケースは東南アジアにはない。

田中 いまの移動の問題は、歴史的な側面で議論されているが、生態や地理的条件も考えて議論したい。東南アジアの島嶼部は、いわば大きな褶曲山脈の端の、しかも端が海に沈んでしまった所である。残っている地面は非常に変化に富み、アフリカと比べれば問題にならないぐらい短い距離に、山あり、谷あり、低地あり、湿地ありという所だ。

アフリカのバントゥの大移動は、よく似た環境を伝っていく。ところが東南アジアでは、似た所へ生活の基盤を広げて行くだけではなく、全く違う所へ移って行く。そこはアフリカと違うと思う。移動のターゲットになる所が、その時代が要請する産物によって変わってくる。例えば山、あるいは低地、海の近くの汀線のように、ターゲットになる地域は本当にバラエティがある。

アフリカの場合は、同じような所へ行って

いるだけではないのか。動く距離は確かに大きいかもしれないが、東南アジアにはそういう地理的な背景や歴史の堆積があって、移動の距離は小さくても地形のバラエティから考えれば、アフリカの移動とは違うダイナミズムがある。

立本 それはインターナル・フロンティアに関係するのではないか。フロンティアが常に内にある。

市川 アフリカでも自分達が住んでいた所と直近の所は似たような環境だが、結果的にみれば砂漠、サバンナ、疎開林、高地、湿地、ほとんどあらゆる所に移動して行き渡っている。ただ、その移動の動機が東南アジアのように特定の利益のためにというような「不純」なものではなかった。似たような環境を通して自然に動くうちに、いつのまにか大きく変化する所に行ってしまったという印象は拭えない。何かを求めて移動して行ったというのではない。

家島 海を一つの生活空間と考えれば、海も人口密度の計算に入れていいと思う。砂漠も人口密度の計算に入っているのだから。

日野 だがアフリカの人は、サハラ砂漠すら越えようとしていなかった。

家島 海をまさに一つの生活空間として活動している人びとの社会・文化が、東南アジア的な特徴の一つであると言える。しかも、その移動の世界は、非常に広域にまたがっている。周知のように、マダガスカルまで移動し

た人もいる。陸地を移動したという点では、バントゥの拡大した世界は大きかったが、海を舞台とした移動を考えれば、東南アジアの人びとも同じようなものではないか。

日野 バントゥのエクспанションを見てみると、森林に入ることもあったが、基本的にはサバンナを動いている。サバンナは遥か遠くの山まで見渡せるような所で、そういう目標物が所々にある。やはり湿潤の森林の多い所、すぐ海岸に出てしまうような所とは違うのではないか。

古川 ゼネラリストという点では同じだと思うが、生活実態としてみると、バントゥでは対象として牛も入ってくるが、東南アジアで牧畜をオルタナティブとして考えるのは極めて少ないと思う。やはり森林物産と海産物を求めて広がっていく印象が強い。それは外の要求に応じる形で、一人の人間が仕事を変えながら動いている。バントゥのスプレディングは農耕と牧畜が対象で、それが生活実態において違ってくる。そこからどういう感情を持つか、どういう生業を繋いで行くかというところが色々と違ってくる。

山田 やはり資源量を考えてほしい。サバンナと熱帯多雨林の資源量は、3、4倍は違う。資源量というのは森林の生態量、あるいは人が利用可能な資源を持つニッチと考えていいだろう。それが東南アジアとサバンナとは全く違う。バントゥの移動は、資源が減少して移動が必用となる面があると思う。東南ア

ジアの移動はそんなに動かなくてもいい。例えば、ボルネオなら一山越えて、谷筋を一つ越えたら、そこで百年ぐらいは生活できる程の資源量がある。

立本 ただ、資源は人が需要して初めて資源となる。アフリカでは需要しないという議論があったが。

山田 それは違うと思う。バントゥでも資源を使いつつ移動していく。資源が十分にあればそんなに移動しなかったと思う。

立本 東南アジアでも、資源は外の人の需要に応じている。香なんかは自分では使わない。

山田 外の需要に応じて動いているのは、1割程度でしかないと考えている。伐採現場でも、ほとんどが外から来ており、地元の人は1割程度しか参加していない。

市川 資源とは、この場合は土地の不足ということだろうか。

山田 土地も含めて。

市川 そういうことではこのような移動は説明できない。もしそうならば、紀元1000年にはアフリカがいっぱいになってしまったと考えなくてはいけない。森の中では既にピグミーが住んでいて、一緒に狩猟や採集をしながら、特に目的がなくても何10kmも一挙に行ってしまうような移動をしていたと思う。土地や獲物が不足するという環境要因は究極的には効いているかもしれないが、実際の個々の移住の要因はそういうことではないだろう。そういう要因ならば、バントゥのよう

な急速な移動は必要ない。

日野 むしろ空いている場所がたくさんあったから動いたというイメージだ。

山田 空いている場所があれば、やはり比較するのではないか。資源量だけでなく、少しでも良さそうだと。

日野 時には社会的なテンションが生じて誰かが動くことも起こるし、呪術を畏れて動くとか、色々なことが考えられる。

田中 いまの議論は東南アジアも内陸アフリカも同じだと思う。東南アジアも人口密度5～10人程度の時があり、その時は移動している。移動は資源の枯渇というより、呪いや親戚関係の軋轢がアフリカでは考えられるが、東南アジアでも病気の発生や首長の死など色々なことで吉凶判断し、凶と出たらすぐに移動している。そのレベルの移動は、東南アジアもアフリカも生業形態が焼き畑をベースにしていたときには共通している。ゼネラリストの時代の移動は、かなり世界共通と考えられないだろうか。ただ、東南アジアはさらにその上に色々なものがある。

高谷 世界共通と言われたが、私もバントゥーの話を聞いて縄文期のことを考えていた。縄文人がバイカル周辺から日本に入ってくるのも同じように感じる。そのスケールを考えれば驚くにあたらない。だからある種の疎林は見通しが利き、移動し易いということが大きいだろう。また凶と出るから動くということも確かにある。森に関係している人々は移動

するゼネラリストだと感じた。

市川 例えば公園に二つベンチがあって、1人1ヶ所座っている時に、まだ座れるからとそのベンチに座る人はいない。いないところに行く。三つベンチがあれば、真ん中のベンチを一つ空けて座っている。やはりスペースが少なくなるというより、なるべく人から少し離れた方が住みやすいということがあるように思う。具体的に細かく言えば、そういうことが呪いとも関係するのだろう。

立本 オーストロネシアンはなぜ拡散したのかというレベルの話と、いまの話のレベルと少し混乱してきているが、移動の話はこれぐらいにして、分散離散、ディアスポラについても議論しておきたいと思う。東南アジアでも同じことを言うが、本当に同じ内容なのかということと、内的フロンティア世界を確認しておきたい。家系図でどこまで辿れるかという話にもつながると思う。

市川 私が分散と言ったのは、1カ所にある程度以上に人口が増えると社会的、政治的な組織化を複雑にしなければ対処できない状況が出てくるが、バントゥーは高次な組織を作らずに分かれていった。それを支えるのがバントゥー社会にあるセグメンタリー・リネッジ・システムで、まさにこの分節システムによって、集団が大きくなると分散していった。

嶋田 西アフリカ内陸ではこうした運動がくりかえされた挙句行き止まりになったところで、階層化せざるを得なくなって国家や都市

が形成されたと考えている。内陸アフリカにはまだ場所があったから拡散を続ける。先程それが縄文人と同じだと言われたが、ヨーロッパ人がアメリカ大陸に広がって行くのも同じではないか。あるいは北海道と同じプロセスではないかなと考えている。

ただ、基本的には場所が空いていたことが前提されていると思うが、空いている場所の使い道がわからないと移動もむずかしい。拡散していく時に何を植えていたのかが問題になる。市川さんはプランティン・バナナと言われたが、バナナは元々は東南アジアの熱帯雨林のもので、内陸アフリカのミオンボ林には植える栽培植物がなかったように思うがどうだろうか。

掛谷 熱帯降雨林から外へ出てくると、雑穀類の世界になる。フィンガー・ミレット、ソルガムなどが栽培されている。

嶋田 アフリカのスーダン農耕はアフリカオリジナルのものとされているが、アフリカの熱帯雨林に特有の立派な農耕はないように思う。東南アジアには元々マニオックやバナナがある。むしろ東南アジアから伝わって初めて潤った面がある。この点どうだろうか。

市川 アフリカの湿潤なところで栽培化された農作物は、アブラヤシとヤムになるが、ヤムは本当に年中雨の多い所ではイモができない。乾期のある所でしかできない。最初はそれらだけを持って漁労をしながら河川づたいに行ったのだろう。先住民のピグミーの案内

を請いながら、森林での生活をやりくりしていたが、東アフリカ、あるいは森林の北東部の方に達した頃にバナナが入ってきて森林の中に広がっていった。初期のバントウの拡散には、イースタン・ストリームとウエスタン・ストリームがある。ウエスタン・ストリームは南の方に来て、森林をまず突き抜けていたと言われているが、最初の頃はまだバナナを持っていなかったのではないかとされている。

嶋田 バントウの起源地と言われているカメルーン高地にはシコクビエはないが。

市川 だからヤムとアブラヤシを持って行ったのだろう。

嶋田 アブラヤシも植えてから実が採取されるまでは何年もかかると思うが。

市川 移住地での当初の生活はピグミー的な狩猟採集にかなりを依存していたのだろう。いまでも森林の中に移住する時には、先に農耕民のいるところに入って居候し、開墾の手伝いをしながら自分の畑を作っていく。少し前の19世紀にアラブの奴隷狩りが来た時には、ピグミーのキャンプに逃げ込んで一緒に生活をしているが、そうした狩猟採集民との共生関係が重要な役割を果たしていたのではないか。全てを狩猟採集に依存して生活していけるかどうかはわからないが、かなりの部分を森の先住民に助けられながら生活していたと考えている。

家島 ディアスポラでは、基本的に三つのポ

イントが問題となる。拡散・移動・離散にともなって、ネットワークを作るかどうか。移動先での対立、あるいは競合がどのような状態だったか。そして移動拡散にともなって共同体的な結びつき自体がどう変わったか。この三つの問題がディアスポラで常に議論されるポイントになる。バントゥをいまの問題に当てはめて質問したい。例えば、ホームグラウンドから移動した足跡はどうだったのか。相互的なつながりによって共同体的な結びつきを作るのか、全然関係なく移動して行くのか。常に先住民なり別の集団がいる場合はどうなっていたのか。対抗・競合ということで考えれば、集団を統合する必要も生じるだろう。それが国家形成の一つの発端にもなりうると思うが。

掛谷 その問題を考えなければならない。私の場合は十分に検討しえていないが、コピトフはかなり議論している。小さな拡大家族の連合体が移って、後から同じ民族や地域出身の人々が先に移った人々を頼って移り住む。一時は元の集団とのつながりもあるが、徐々に切れて行く。ただし、組織化のイデオロギーは持ち続けており、それを一からやり直すということだ。アフリカのインターナル・フロンティアはむしろコンサーバティブで、前から持っていたイデオロギーを保持したまままで移動し、また一からやり直していく。帝国まで登りつめるのは極く少例で、多くはセグメンタリーな動きで分かれていく。このよ

うな形が、アフリカの内的フロンティア世界のポリティカル・カルチャーではないかというのが、コピトフの議論になっている。

移動先での競合は、「草分けの原理」が強く働く。草分けの先住者達はその土地の精霊や祖先霊と共に一つの世界を組み立てていく。ルバは草分け的な存在から帝国へと展開したが、その草分けの原理を拡張して、その影響圏を広げていく。いわば精霊信仰や祖先霊信仰のマニプレーションを通してリネッジ・システムをコントロールしていく。

前に先住者がいるときには、後から来た征服者も儀礼的には草分けの原理に倣う。王の即位の時にも必ず土地の霊力者が認めなければならない。あるいは儀礼的には従わなければならない。後から来た者は権力を得られない。

こういう問題は、確かにフロンティア論やディアスポラの一番大きな問題だと思うが、私はまだ整理しきれていない。

坪内 いまのリネッジが気にかかる。東南アジアにも無理して探せば、例えばミナンカバウの移民がどう住み着いたかという問題では同じようなケースが見つかると思う。だが、東南アジアでは、むしろリネッジを逆に押し下げて、もっと動く主体を単純化してもいいように思う。親族や組織は強調しなくていい。かたまりは確かにあるが、それがわりと小さくても平気で動いて行けるし、そこに別のかたまりも寄りついていけるという想定をした方がいいだろう。そういうような形で捉えれ

ば、アフリカとの差が見えてくるだろうか。

掛谷 私もそう思う。坪内さんや立本さんの本を読んで、東南アジアとの違いを感じるのは、アフリカではリネッジ・アイデオロジーがかなり強いという点だ。ただ、その場合、アフリカをおしなべてリネッジ・アイデオロジーが強いと言いきってよいのかという問題があるが、血縁を辿ってリネッジを作っていくだけではなく、イデオムとしてリネッジを使っていく、あるいは擬制的にリネッジを作る形で集団化していくことが、アフリカの根深い伝統ではないかと考えている。

例えば富川さんや和田さんが調査された所でも、違う部族出身者がクランという形で入ることがいくらかでもある。トングウェはその集合体と言っていい。リネッジ・アイデオロジーが強いということが、最小生計努力や平準化のメカニズムを生み出す。リネッジ内部では、ポテンシャルとして平等でありうる。そういう構造がもたらす平等性であり、それゆえ一方ではリネッジ間での対立が生じる。アフリカの場合は、その根元にリネッジ・アイデオロジーがあると思う。

立本 このような比較の時に、「移動と拡散」というように抽象化すればみんな同じになるし、また現象に目を向ければ色々なケースが見えてくる。ネットワークも、「どちらにもある」というのが答になるだろう。ただ一つ言えることは、東南アジアをアフリカと比較した場合、「作られたものとしてのネッ

トワーク」というよりは、「作るものとしてのネットワーク(ネットワーキング)」というのを考えた。移動先と元とのネットワークは非常に一時的ですぐに切れてしまう。二世代、三世代で切れてしまい長くは続かない。リネッジの強いところでは続いているケースもあるが、それも東南アジアの中では無文字文化や口頭伝承でつないでいくようなものはなく、たまに系図を残していても、それが実際にネットワークとして機能してはいない。東南アジアでは移動先で融合し、消えて行ってしまうことが多いのではないか。それがアフリカでは部族本位制、部族際というものと、東南アジアは双系性という比較になるのではないだろうか。

掛谷 確かに抽象度を上げると似てくるし、現象に目を戻せば違う部分がある。それはやはり、比較の単位と時代という問題とも関わり、非常に錯綜した構造になると思う。何を比較するか、あるいは全体が比較できるのか、あるいは「まとまり」のないものが21世紀に向かって、「まとまり」のあるものとして考えうる基盤は何かを探っていく方向に収斂する形で、今回の研究会のまとめとしたい。

立本 アフリカニストの中でも、川田さんが「ラディカルな発信」と言われている。ラディカルな歴史のないところで、アフリカとしての発信をしなければならない。東南アジアとしてはネットワーキング等、色々と発信したいと考えているが、アフリカはどうだろ

うか。

掛谷 なかなか難しいが、今日の議論は、アフリカ研究者が集まって、スワヒリ、サヘル、内陸アフリカという形でアフリカ論を論じたのは有意義だったと思う。日頃の部分的な意見交換ではなく、アフリカの全体像が意識できたのではないか。立本さんの質問を受ける形で、我々4人が話したアフリカのイメージが、どのように関連するのかという印象論から始めていけばどうだろう。

我々は嶋田流に言うと貧しい世界を調査してきたが、嶋田さんは豊かな世界を対象とし、サバンナの資本主義の展開という議論もされている。ただ、お互いに一つの像だけではアフリカは語れないという想いはあるだろう。そのあたりを踏まえて議論してみたいと思う。

嶋田 比較の単位を考えれば、東南アジアという熱帯のグリーンの地域は、アフリカではギニア湾やコンゴ・ザイールの森あたりに比較できるだろうが、サハラは東南アジアにはない世界だと思う。無理すればマレーの海域世界とサハラを比較できるかもしれないが、海域世界は熱帯多雨林の世界でサハラのような乾燥地域とは違う。歴史の深さということでもアフリカ内部にかなり大きなちがいがあるように思う。

アフリカ研究者より東南アジア研究者の方が、東南アジアは一つだというような意識があって、インドや中国の華中・華南は東南アジアではないという、何かアプリオリに切ら

れすぎているような印象を受けた。

立本 アプリオリには切っていないが、他の地域との議論ではそうなる。

日野 アフリカの特徴は、サハラ砂漠と海に囲まれた非常に広大な大陸だ。それでもやはり一つのかたまりで考えられる。私は都市を中心にアフリカの東と西との比較を考えているが、アフリカ全体で考えれば、バントゥ世界は西アフリカから広がってきたフロンティア世界の開拓というイメージがある。もちろんブッシュマンやピグミーという先住民もいたが、基本的には非常に人のいない所、しかも見晴らしのいい所を動いてきた。そういうフロンティア性がある。そのあたりに西アフリカと東アフリカ、あるいはサヘルとスワヒリ、バントゥ世界を一緒にした視点が出てくるのではないと思う。

東アフリカにおけるスワヒリ、西アフリカのサヘルから広がって行くイスラーム文化がまずあった。そして、海岸からの西欧の植民地化という動きがある。このような形で、西と東は何か一体化できる捉え方があると思っている。嶋田さんが歴史の深さと言われているが、私は内地と北海道という比喻で捉えている。西アフリカには城下町が多いが、東アフリカには入り口に松前城にあたるようなウガンダ等の王国はあるが、いわゆる城下町はほとんどない。あるとすれば小樽や函館のような港町だ。これはある程度色々なことに敷衍して考えられる一つのアイデアで、ヨー

ロッパとアメリカ、イギリスとニュージーランドやオーストラリアなど、色々なことで考えられるかもしれない。

市川 東南アジアのような、よく言えば進取の精神に富んだ、しかし悪く言えば不純な動機で発展志向的に展開した世界と、アフリカのように積み上げ志向的なものを持たずに、移動と分散を繰り返してきた社会が発信できるものは何かということになると思う。そういうことからみるならば、嶋田さんの発表されたフルベは明らかに違う。バントゥの農民とフルベとは非常に印象が違う。フルベはジェントルで礼儀正しく、悪くも良くも文明化されている。森林の中のバントゥはどちらかと言えば、がさつで我々にとっては親しみやすいが、そういう世界とは全然違う。これを一まとめにできるかどうかかわからないが、元々は一つのところで最近まで近接していた。それを切り離す理由はない。ましてやアフリカを分断して、東南アジア、中央アジアと一緒にくるめようというような考えには抵抗を感じる。

そうすると比較の単位はもっと小さな範囲がいいのかもしれない。バントゥというのもまだ大きい。森林の中の東南アジアの森林居住民と、アフリカの森林居住民の文化と生活はどこで違うかを見てみれば、エコロジカルなニッチとしては似ていても、歴史文化的な背景の違いからどのように違ってくるのかが比較できるのではないか。

掛谷 確かに内地と北海道という比喻はいいと思う。私の場合は、アフリカは東北に、東南アジアは筑波周辺に似ているという印象をもっている。筑波は江戸の後背地であるとともに、東北の最南端である。たいへんゆとりがあり、堂々と昔からの伝統をつなぎ、東京からの流れに対しても免疫ができています。それに対して東北は抵抗性が弱く、何かがあると根こそぎやられてしまう。粘り腰の筑波周辺と、中央からの急激な刺激で腰折れになりがちな東北。しかし、東北には強い存在感があり、未来につながるポテンシャルをもっている。内地と北海道という対比も重ねていくと、アフリカの西と東が感覚的に纏めるようにも思う。だが一方でアフリカが現在抱えている問題は、西も東も同じことが多い。内紛や、国家が体裁をなさないという問題、もちろん世界システムとの関係もあるが、アフリカ内部の問題に対しては悲観的になってしまうときがある。そうした現実を踏まえつつ、21世紀を展望しなければならない。

そういう意味ではアフリカは一つで、それこそサハラの手と本当の手とに囲まれた世界が抱えている問題は共通している。サヘル、スワヒリ、内陸アフリカが、現代という時代の中で、どういう部分のアフリカ的なものを強制的に析出させられているのか。アフリカは内的にはどういうものを析出しようとしているのかを地域研究で考えていく必要を感じている。

日野 フルベやハウサという、いくらか特別なグループもいるが、基本的にはアフリカは平準化で捉えられると思う。争いをして殺しを合いをするよりは、自分が離れていく。呪術の対象にならないように目立たないようにする。そういう点で言うと、なるべく競争という形を露にしない社会だと思う。牧畜民、狩猟民、採集民、農耕民がいて、それぞれ自分の得意とするものをお互いに交換したり、時にはメンバーを交換する。ほとんどのところでよそから来たメンバーを受け入れる手続き的なものが必ず用意され、もちろん客人として扱う形も用意されている。

そこに植民地で切りとられた国民国家が成立すると、限られた資源を巡る世界的な競争社会の中に放り込まれてしまう。外から来た援助も、国の中の資源も含めて、権力を持った人がよりたくさん取れるという競争社会が出てきて、平準化と競争社会という非常に明確な形の矛盾として現れてくる。かつてヨーロッパや日本が援助するときには平準化社会は遅れたものとし、世界的な現象の普遍的な競争社会に肩入れをして援助する。それがルワンダ、ブルンジ、ソマリアで見られるような現象として現れる。

また、アフリカの人は平準化の側面を持つと同時に、内には攻撃性を秘めているところがある。それが下手に現れると、ルワンダやブルンジの殺し合いというような現象として現れる可能性もある。カッととなると平常心を

失う、あるいは酒を飲んだときに平常心を失うような面がアフリカの人に目立つ。これは日本人に全くないというわけではないが、アフリカでは秘めた攻撃性と、それを制御するためのメカニズムとしての平準化があるという印象を受けた。暗い話になるが、国民社会原理を突き詰めていけば、殺し合いが続くように思う。バカらしいからやめようという意識が出てくるまで続くのかもしれない。それは東南アジアではどうなのだろう。

立本 カンボジアや共産主義者虐殺の例もあるので、平準化だけでなく攻撃性という面もあるかもしれない。

嶋田 考え方によっては、アフリカ大陸というのは新大陸の一部だともいえる。文明はユーラシアを中心に発達したが、ユーラシアからもっとも切り離されていたのが北米大陸とオーストラリア、この次ぐらいに切り離されていたのがアフリカではないかと思う。切り離されていた所にいた人達、オーストラリア原住民もインディアンも滅びかけている。アフリカ大陸がそれと同じような状況に向かうのではないかと危惧している。

サハラ南縁のサーヘル地帯では外的文明との交流があり、このことの意義を強調してきたが、やはりアフリカは全体としては外との交流の少なかった世界だと思う。バントゥーに象徴されるように意外とホモジニアスで、多様性があるようで無いような社会だ。東南アジアは海洋世界で昔から海の交流があった。

現代の世界においても様々な交流があり、外的世界との関係が強いと思う。田中さんは、いまは外的な刺激があるだろうと言われたが、東南アジアに比較したら内陸アフリカにはいまでも外的刺激ないと思う。アフリカはやはりすさまじいまでの大陸世界として考えなければならない。

伝統的に大陸世界としてのアフリカが、外とつながる唯一の動脈がサハラ砂漠だった。ところがいまは色々な国境紛争等で交易や交通が分断され、せいぜい一年に一度パリ・ダカールの自動車ラリーがおこなわれる程度だ。これをもう一度何とかしないことにはアフリカはますます孤立し、近代化もうまくいかないのではないか。

和崎 バムンは南のギニア湾岸の森林世界と、サヘルとの接合点に王国を発生させている。そういう王国はギニア湾岸に平行していくつか残っている。その中には森林王国もあり、生態論として言えばそういう王国から森の世界と乾燥世界とを繋ぐ論理を語るができるように思う。

アフリカには直線の国境線が多い。外在的に与えられた国家と言えるが、生活実態をそれぞれ見れば、マサイがケニア・タンザニアの国境を関係なく動いていたり、チョウチョを追いかけている間に国境を越えてしまったような話も多く聞かれる。カメルーン・ナイジェリア間、カメルーン・チャド間の国境線は、民族差異と言えるだろう。インターエス

ニックの世界では越えている。商業の世界でも実際には越えている。そういうネットワークは昔からもあったし、いまもあるだろうと思う。ネーションステート自体をもう一度問直す意味でも、アフリカの伝統的に根強く残っている民族差異を描き出すことで、ある発信ができるのではないかと思っている。

日野 嶋田さんが言われたように、まさにマリがナショナルランゲージを作ろうとしたとき、全部インターナショナルランゲージだったという現実がアフリカにはある。

掛谷 いまアフリカを語るときに、ある意味では苦渋に満ちた表現にならざるをえないところがあるが、そういうアフリカ的世界をと対比したとき、地域としての東南アジアはどう位置づけることができるのだろうか。

高谷 私にはアフリカが本当に素晴らしい所だと思えた。市川さんは、東南アジアは儲けに走っているがアフリカはもっと人間らしく森と共生しているという。掛谷さんも平準化と言われていた。アフリカだってやはり儲かるものがあるから移動するのではないかという疑いを持つのだが、やはりそれは違うようだ。

私など、東南アジアは森の民でいいところがあると言っているが、本当は「気の毒な近江商人」という感じがしないでもない。非常にこすいところがある。でも本当に全部がそうかと言うと、そうでもない。そのところを認めてもらいたい。非常に屈折しているが、けなげに生きている。その意味では東南アジ

アはしんどい。ところが、アフリカは天性森の民で、何も考えずにのんびりと暮らしている。これは非常に良いことだと思う。アフリカはそのこと自体を発信すべきだ。屈折をしたメッセージを出すのが良いことではない。そういう意味では、アフリカは東南アジアよりもずっと純度の高い高尚な世界に思えた。

掛谷 アフリカはドライな感覚がベースにある世界だと思う。東南アジアはウェットな部分も含んでいて、我々も感覚的には東南アジアに魅かれるところがある。

阿部 最後に苦渋に満ちたアフリカというイメージが出てきたが、研究者としては全く苦渋に満ちていなくて、むしろ明るくストレートにされているように思う。むしろ東南アジアは、中国があり、インドがあり、イスラームも来る中で、外世界に向かう開放系としてある。海岸線からみてもやはり開放系ということが言えるだろうし、様々な外的要因と関わる中で、何とか東南アジアとして生き残ってきた。そういうことを繰り返しているのが東南アジアなのだろう。アフリカは閉鎖的な中で、ストレートに明るく展開する世界という印象を受けた。だからこそ大事にすべきではないかと思う。

田中 アフリカは一つではないというのが、私の今日の結論だ。仮にアフリカと同等な地域を東南アジアを中心において考えると、インドの東海岸から中国の渤海、山東半島までを一番北の端にして、オーストラリアの端ま

で至る三角形を書く。そうすると、南アはオーストラリア、地中海にあたるのがベンガル湾、エジプトにあたるのが中原、サハラ砂漠はインド洋の東半分、アフリカにとってのインド洋が南シナ海というような対比ができるのではないかと。こういう比較をしてみると、アフリカの内陸部は、やはり東南アジアの島嶼部だろう。そして、サヘルにあたるのがマラッカ海峡、あるいはビルマから南タイの海岸あたりで、東海岸にあたるのはフィリピンやボルネオの北になるだろう。

そうすると「東南アジア固有」のという言葉を使う時には、アフリカ内陸部と島嶼部の比較がもっとも妥当ではないかと思う。そして、こうして比較した時のいちばんの違いは、大きな三角形をとったその中心になる東南アジア島嶼部は海に囲まれているが、アフリカ内陸部は陸地に囲まれているという点にあるのではないかと。それぞれ個別に見ていくと移住があり、色々な生業があってよく似ているが、海と陸という大きな構造の違いが歴史の違いとなって、開放的な世界と内的な世界がそれぞれ形成されてきたのだろう。東南アジアとアフリカ大陸を直に比較しても見えてこないが、アフリカとイクイバレントな先程の三角形を考えれば、うまく比較できるのではないかという印象を受けた。

家島 概して、中東と西ヨーロッパは、自然生態系の諸条件から言えば、非常に貧しい。一方、東南アジアとアフリカは豊かで多様な

自然生態系を持っている。その意味において、東南アジアとアフリカという広く熱帯・亜熱帯を含む地域が、21世紀に向けて重要になると考えている。もちろんアメリカ大陸もそうだが、この豊かな自然生態系を持った熱帯、亜熱帯をどう活用していくかが、これからの人間がどう生きるかということと深く関わっている。アフリカは実に豊かな、広大で多様な自然生態系を持っている。そういう面では、東南アジアも非常に似ている。この二つをどう人類が共有し、互いに共生していくかという問題に関わってくるだろう。

アフリカは歴史的に非常に長く平和に生きてきた。そこでは多種多様な色々な民族・部族・集団が共生しており、大帝国を作って対立と衝突を繰り返すのではなく、平準化的な相互交換や交流の中で共生社会を築いてきた。その倫理は、これからも生かしていく必要があると思う。

松原 現在史性という点から、アフリカは一体として見るべきだという主張を続けてほしい。私としては、アフリカ全体がゼネラリストを基盤とし、それに基づいた差異化を無視することはできない。アフリカを一体として見ると同時に、簡単に一緒だと言うのではなく、その差異化をもう少し丁寧に追ってほしい。例えば南アフリカやブルーの問題は、アフリカの中で異質なものを持っているという印象がある。エクспанションしていくようなものがなぜ南から出てくるのかわからない

が、おそらくアフリカの歴史全体からいえば、まだ語り尽くされていないことが多いのだろう。

かつてサハラが大きな動脈としての流通を担い、現在は分断されているということはあがあるが、やはり一つの系の中で自律的に発展してきた現象が見られる。王国の形成にしてもそう。そのところがユーラシアのそういう形成といかに違っていたのかを強く主張してほしい。そうすれば現在世界の中での、アフリカを一つとして見るという主張が補強されるのではない。やはりアフリカ地域研究は重要だと思う。

山田 次のテーマをどうすればいいかを考えていた。いままではアフリカ、インド、中国というように比較していたが、乾燥地だけでもきめの細かい議論が必要だ。湿潤熱帯でもそうだろう。地域名ではなく、もう少しエコロジカルなベースにしてはどうか。例えば湿潤熱帯と乾燥地帯の比較研究という方法で、いままで縦に切っていたのを斜めに切るという形の方法論で討論すれば、別の世界が浮かび上がってくると思う。いまはアフリカは一つだと言われていたが、もう少し別の視点が明確に現れてくるかもしれない。

古川 アフリカは一体性を保っている印象を受ける。その中で相互作用がある。それをあえて亜区分すれば、いくつかの地域には分かれるのだろう。その亜区分で分かれる、例えばサハラとギニア湾を中心にした熱帯多雨林

と、東アフリカとの間の差異は明らかにしてほしい。

アフリカが恵まれていると思うのは、アフリカ研究はアフリカだけにとどまらないことがあるだろう。立本さんがディアスポラという観点をめづられたが、アフリカは昔から奴隷狩りでディアスポラしていたと思っている。その巨大なフラクションが新大陸に行っている。彼らの持つ強烈なエネルギーは決して無視できない。大きく21世紀の世界に効いてくるのではないか。

坪内 これまでの地域間研究で、インドと中国を扱った時、結局そこでは地面の話はほとんど出ずに、人間か社会組織かイデオロギーという話に終始したと記憶している。アフリカに至っては、やはりエコロジストが強い。エコロジストが語った地域研究のスタイルが出てきたことに改めて感銘した。やはり地域研究の本場はこの二つの地域にあるのかもしれないという印象を受けた。

日野 西アフリカと東アフリカの都市の比較研究という、海外調査のプロジェクトの時に、東の研究者には西に、西の研究者には東を見えてくるプログラムを組んだことがある。東南アジアとアフリカでも、一方は東南アジアへ行ってみて一方はアフリカに行ってみるといって、そういう海外調査をされてはどうか。

掛谷 いま、部分的には山田さんの研究班で行われている。アフリカからも市川さんが代表になり、世界を見てまわる調査をしている。

立本 例えば、都市の比較や生態の比較、そういう細かいことでの比較ではなく、地域という場で比較することが必要で、それを基礎にして我々は議論しなければならない。そこでこだわるのは、第1回の「東南アジアとアフリカ—地域間研究に向けて」でも比喩として出したが、「物見と網方」の視点である。伊豆の漁村で猟師さんに聞いた話で、湾の外まで見渡せるところから魚の動きを見て指示する「物見」と、実際に湾の中で網をかける「網方」という二つの役割がある。全体を見る人と部分を見る人ということで比喩できる。網の比較でも、糸満の網と伊豆の網を比較しても学問となり、それがディシプリンとなる。それと同じように、生態や都市の議論はディシプリンに還って行くのではないか。ディシプリンが地域という場で比較することは必要だが、地域研究という看板を掲げるのであれば、もう一歩越えて行かねばならない。

地域研究はあくまでも物見の視点が必要だと思う。もちろん網方であり物見でもあるというのが一番いい。物見だけでは口ばかりになるが、網方をした上で物見になることが地域研究なのではないか。物見の見る範囲が十分かどうか、言い換えれば地域単位のレゾンデートルが十分か、単位としての世界を成しているかが地域研究の一番根本的なところだ。それを高谷さんは世界単位と言う。地域研究はその物見の態度、物見が見るレゾンデートルとしての全体に意味がある。もちろん地球

全体を見れば一番いいが、地球全体の次の単位は何か。それは国家でも大陸でもなく、地域研究者として「これが地域の単位だ」という自分なりのレゾンデートルを考えておかなければならない。少なくとも地域研究で地域間比較をするのであれば、ディシプリンではなく物見の視点で地域を比べなければならない。例えばアフリカは「移動と分散」、東南アジアは「ネットワーキング」という、ある意味では非常に抽象的な話になるが、それは掛谷さんのように自分のフィールドワークから出てくる話でバックアップすることによって、メリハリを効かすことができる。東南アジアの分け方自体、田中さんのような議論もあるし、私は雲南あたりを原マレー、メラネシアをプロトマレー、こちら側をセントラル

マレーと、全部マレー圏にして議論することもある。東南アジア海域世界としても色々な範囲がある。地域研究は網方の視点だけでなく、物見の視点で比較しなければならないというのが、地域研究に対する私の考えになっている。

掛谷 この二日間にわたる議論は非常に意義があった。アフリカ地域研究を進めていく上でも確かに物見のセンスのある人が必要だが、非常に難しい要求でもある。私自身は網方にむいていると思うが、21世紀を展望するとき、物見も確かに必要なのだと再確認した。地域研究では東南アジアとアフリカは手を携えて、地域研究とは何かということを考えていく上でも、先端部分であり続けねばならないだろう。